

同じ日の繰り返しではなく、もっと違うことを。

フタバ食品株式会社 代表取締役社長：増淵 正二

守りより攻め

氷菓、サクレモンなどで有名なフタバ食品(株)は、アイスクリームの他、さまざまな菓子類や中華まんじゅう、餃子など幅広い食品を製造販売する食品総合メーカーである。昭和20年に初代見当邦雄氏が栃木食糧品工業(株)の名で創業し、38年に双葉食品興業(株)と合併してフタバ食品と社名変更。増淵正二氏は、4代目になる。

実は、増淵氏の父親と初代社長は高校時代の友人で、栃食時代から二人三脚でやってきた仲。当然、入社への誘いはあったものの、「海外に行つて仕事をしたい」という強い思いから、大学卒業と同じ



Profile

増淵 正二 (ますぶち しょうじ)

昭和22年8月21日生まれ65歳。栃木県立宇都宮高等学校、慶應義塾大学商学部卒。安田信託銀行(現みずほ信託銀行)にて国内外で活躍し、ロンドン支店長、本部法人部長など要職を歴任。平成11年に同行を退社、フタバ食品(株)に入社。総務部長、取締役総務部長、常務取締役総務部長を経て平成19年に現職に就く。25歳で結婚、一男一女の父。



時に安田信託銀行に入行。国内はもとよりニューヨークやシンガポール、ロンドンなどで活躍。30代後半には、手腕を買われ芙蓉グループとして丸紅の業務部へロッキード事件後の支援をかねて出向したこともある。「商売や物流などの勉強になった」と当時を振り返る。もともと物怖じしない性格に、こうした国内外での要職の経験が活かされて、守りから攻めに転じる現在の経営姿勢が生まれたと思われる。

「縮小均衡は、必ずその先に破綻がある」と、肌感覚で満足していた会社の風潮にカチを入れ、「今何が必要か」と、あえて問題提起をさせる。もちろん調査・分析などマーケティングも徹底し

て行い、売上急増につなげた。昨年度の売上高は156億円、さらなる上を目指している。

学びなくして成長なし

「見、温厚で物腰が柔らかく、東日本大震災の被災者の詩が綴られている『ありがたの詩』に感動し涙する反面、社員に『信念を持って、喧嘩をしなさい』と焚きつけ、自らポジティブな発想と行動力で敏腕ぶりを発揮する。そのバイタリテイ溢れるチャレンジ精神はどこから生まれてくるのだろうか。」

3人兄弟の長男として育ち、幼稚園時代は母親に手をひかれて泣きながら通園。その、泣き虫

が、小学校で授業中にとり組み合いの喧嘩で3時間の正座を甘受してから、徐々にわんぱくぶりを発揮した。中学はバレーボール部に所属し、卒業式では総代の大役を果たした。「女性には不人気でして……」とうそぶく。高校に入學してから順位がガタ落ちし、「勉強しないとダメだ」と気付き巻き返しを図る。

大学4年になりたての時、交換留学生として3カ月間アメリカのオハイオ州に住む。あまりの生活レベルの差に「アメリカはすごい!!」と驚嘆。日本では冷蔵庫の普及が話題になっていた時に、アメリカは月にランニングするほど宇宙開発が進んでいる。その格差に海外への憧れが強まったの

は、当然かもしれない。いい意味での競争心も刺激になった様子。

仕事やプライベートで訪れた地は20カ国ほど。「元氣な内は、一生懸命仕事をする。生物学的に体力の落ちる70代にはリタイアし、夫婦で秋冬は、ペナンかゴールドコーストでゆっくりとしたペースで過ごしたい」と。その時までは、「社長業を全身邁進してやる」と言いきる。

確かに、趣味といわれるのは読書くらい。常に4〜5冊は手元に置く。小説や歴史ものだが、そこから多くのことを学び、知識として蓄えている。そして「人は自ら学ばないといけない」とも言う。学びなくして成長はないと、社員にも様々な学びを奨励している。仕事に直結しなくても奨励金を出し、成果には報奨金を出す。社員の子ども達にも高校、大学の補助金制度を設けている。

これらの根底には「もともと栃木の県民性は保守的で、新しいものにチャレンジするのに否定的。それは企業にとってはハンディになる。変化を求めていかなければ企業の伸びはない。そのためにも学び成長する必要がある」という信念がある。学びなさいと言っよりも、学ぶ環境づくりをして体質を変えようとしているのだ。

「同じ日の繰り返しではなく、もっと違うことがしたいと思ってもらえたらいい」と。

遙かなる冒険心

座右の銘は、「進取」。自ら進んで物事に取り組むこと。増淵氏はその言葉を「エンタープライズ」とも訳す。その言葉は、アメリカ空母にもSF映画スタートレックの宇宙船にも命名されていて、遙かなる冒険心を彷彿させる。人生への冒険心、ロマン、憧れ、チャレンジ……。それが、若き日から増淵氏の胸に秘められた生き様なのだ。

「人生は長いようで短い。ストレスをためないよう責任を全うする」と。また「面白いうちにやめるのがいい」と自らの会社人間としての退路を決め、それまでは、徹底的に社長業をこなす覚悟。「まだまだ、目標までには到達していない」と謙遜するが、着実にその成果は社員や業績に表れ、めざましい商品開発や販路拡大につながっている。「歩着歩実」にこなす、質実剛健の精神も身についてきた」と内省する中、次なるターゲットは、シニアと海外。そのための施策は、すでに始動している。